

カンボン・バルのアチェ移民による被災支援風景

川端隆史*

「アチェのあなたの家族や友達は大丈夫でしたか？」という私の問いに、あるアチェからの移民は、夕暮れのカンボン・バルの喧噪のなか、悲しそうに顔をかぶりを振った――。

私は、1月11日付スター紙がカンボン・バルでアチェ出身の移民達が故郷の支援のための活動をしていると報じた¹ことがきっかけとなって、1月16日、クアラ・ランプールのカンボン・バルを訪れた。カンボン・バルは、ペトロナス・ツインタワーにほど近いところにあり、首都の真ん中にマレー・カンボンの様相を呈す一方で、アチェ移民の他にも南部タイのマレー系移民²や地方からの出稼ぎ者たちも多数居住しているという都市的な移民社会の縮図という側面もある不思議な空間である。私がここに案内した日本人は、誰もが、クアラ・ランプールの真ん中にこんなところがあったのか、と驚く。

マレーシアでは、今回のスマトラ沖地震及びインド洋津波について、津波が観測史上初めての経験であるということ、死者が68名に上ったこと

などから、大きな衝撃が走った。災害もほとんどなく、極めて安全な国というイメージを、国民も外国人も持っていたマレーシアであるから、予想外の事態であったと言ってもよい。報道各社は、マレーシア国内はもちろん、被害にあった各地に多数の記者を派遣し、国内の通常のニュース面がほとんど埋め尽くされてしまう程に大きく報じた。地震直後に私がたまたま連絡を取ったクランタン州の州都コタ・バルに住む私の知人は、「確かに揺れを感じたような気がした。クリスマスの夜に仲間と酒を飲んで帰ってきたからまだ酔いが残っていると思ったが、テレビや新聞を見たら大変なことになっていた」と興奮混じりに語った³。

マレーシアの各メディアの特徴として、国内での支援活動は無論のことであるが、特にマレー語紙においては、ほぼ毎日のようにアチェに関する記事が掲載された。アブドゥラ首相もOIC(イスラム諸国会議)議長として、参加国に呼びかけ、

¹ 2005年1月11日付のThe Star別冊のStar Metro第1面～第2面“In aid of troubled brethren: Acehese in KL set up aid collection centre”。この報道によれば、支援センターは、12月29日に設置され、1月30日まで活動予定であり、報道の時点では、毎日約800～1000リンギの募金があり、計11万リンギの募金があったとしている。

² 後述する津波被害のビデオCD以外にも、南部タイにおける軍と地元住民の衝突事件に関するビデオCDが露天で売られていた。

* 在マレーシア日本国大使館・三等書記官。本稿は筆者の個人的見解に基づくものであり、在マレーシア日本国大使館、外務省及び関連機関の見解を代表するものではないことをあらかじめお断りしておく。

³ 各種報道は、コタ・バルでは、公立病院の入院患者等が一時的に避難したと報じた。また、筆者の知人は、コタ・バルにあるルネッサンス・ホテル隣のコンドミニアムの多数の住民が揺れを体感したと語っている。このほか、揺れを感じたとされる地域は、クアラ・ランプールのスランゴール州でも多数あり、報道ではクアラ・ランプールの郊外の住宅地タマン・デサのコンドミニアムの住民が一時避難した様子が報じられ、実際にそのコンドミニウムに住む筆者の知人も避難したと語った。

アチェの孤児支援を行う意向を表明している。アチェの被害状況については、最も被害の多い地域であったということもあるが、歴史的・文化的・言語的紐帯、そして、ムスリムとしての同胞意識などから、マレーシアにおいては格段の注目を受けた。

ここで、カンボン・バルでの私の体験談に戻りたい。

以前から、アチェとマレーシアの関係については個人的にも関心を持っていたことも手伝い、アチェからの移民⁴が多いと聞いていたカンボン・バルからチョウキットにかけての地域を歩いてみようと思った。

アチェ移民の数についての正確なデータは無いと言われるが、ルーツをアチェに持ち、マハテイル政権下で農業大臣などを歴任したサヌシ・ジュニド(Sanusri Junid, Tan Sri)氏が会長を務めるマレーシア・アチェ人協会(Malaysian-Acehnese Association)は、毎年1回、2万人のマレーシア生まれのアチェ出身者と3万人を越

える労働目的の移民との会合を開催している⁵。この数字は、同協会が把握しているだけの数字であり、また、クアラ・ルンプールの人口が約140万人ということを考慮すれば、アチェ移民という存在は、クアラ・ルンプールという街の風景にとっては、ごく当然に存在するのである。

アンパン地区の自宅から車を走らせ、クアラ・ルンプールの目抜き通りであり、ツインタワーをはじめとする近代的なビルが建ち並ぶジャラン・アンパンを抜け、5ツ星ホテルのルネッサンス・ホテルの脇を抜け、しばらくすると、突然、野菜や肉、ドリアンなどの屋台が並ぶ通りが現れる。この地域がカンボン・バルである。車をとめ、アチェ支援センターがあると報じられていた通りに向かって歩いていった。カンボン・バルのメインストリートの1つであるジャラン・ラジャ・アランの上空には、「アチェを救おう！」とマレー語で書かれたのぼりがはためいていた。センターは、テントを3つ、机を数個並べた簡単な作りであった。募金箱があり、私が幾ばくかの募金をすると、バンダ・アチェでの津波被害についてのビデオCDを渡された⁶。センターには、新聞記事の切り抜きや、汎マレー

⁴ アチェからのカンボン・バルへの移民については、Diana Wong & T. Afrizal T. Anwar, 2003. *Recent Acehnese Migration to Malaysia: Memories of Migration and the Migration of Politics*. Siri Laporan Penyelidikan IKMAS (IKMAS Research Notes Series), No.6, JUNE 2003), Institute Kajian Malaysia dan Antarabangsa (IKMAS): Universiti Kebangsaan Malaysia (UKM)が移民に対するヒアリング調査をもとに、移民の出身階級・動機等に基づいた興味深い試論を展開している。

⁵ サヌシ・ジュニド会長とのインタビューは、2005年1月9日付The Star “A wave of hungry Acehnese?”、同日付 Utusan Malaysia 日曜版 Mingguan Malaysia 紙 “Masyarakat Aceh akan bangkit semula”が行っており、同会長がマレーシアにおけるアチェ移民コミュニティ、バンダ・アチェの被害状況、独立アチェ運動(Gerakan Aceh Merdeka: GAM)等について語る大変興味深い内容となっている。

⁶ インドネシアのテレビ放送をまとめたもの。息絶えた子供をがれきの山から探し出す住民の姿、変わり果てたバンダ・アチェの様子など惨状が写されている。

シア・イスラム党 PAS が作成した支援活動ポスターが所狭しとベニヤ板に貼られていた。裏には米袋やミネラル・ウォーターの箱など支援物資がうずたかく積まれていた。道行く人の関心も高く、多くの人が被害状況を生々しく物語る写真に見入っていた。日本でどのような報道がされているか、マレーシアに住む私には、NHK の衛星放送や一部の新聞でしか知る術がないが、こうした写真は少なくとも私が日本の報道機関や CNN などで報じられて知っている以上の惨状を写しだしていた。

センターで活動をしている人々に話しかけると、皆、アチェ出身の移民であった。家族や友人は大丈夫か、と私が問うと、「全く分からない。誰からの知らせも、手がかりもない」とかぶりをふる人ばかりであった。

彼らにお礼を述べた後、マレー料理やスマトラ料理の屋台が建ち並ぶ通りを抜け、帰途につく前に立ち寄ったチョウキットに近い場所の薬局の店番の女性もアチェの出身だった。彼女も、私の質問に対し、「家族や友達の話は分からない。ただ、バンダ・アチェの様子はひどいことになっている。それしか分からない」と話した。そうした悲しみのなかでも、彼女は笑顔を絶やさず、日本人か、何をマレーシアでしているのか、と人なつっこく話しかけてくる。私が店を去るときも、元気に客の相手をしていた。もう日が落ちる頃であったが、まだまだこの街は活気に満ちあふれていた。アチェやマレーシア西海岸諸地域をはじ

め全ての被災地域が、カンボン・バルの絶え間ない活気のように、1 日も早く復興し、人々に平穏な日々が戻ることを祈らずにはいられない気持ちで、私はカンボン・バルを後にした。

追記と追想：本稿の趣旨とは逸れるが、筆者は、2 月初旬、マレーシア国民大学マレーシア国際研究所 (Institut Kajian Malaysia dan Antarabangsa, Universiti Kebangsaan Malaysia: IKMAS, UKM) のアブドゥル・ラーマン・エンボン教授と短時間話しをする機会があり、同教授は、あるフォーラムで「単純に比較することはできないが、2001 年の 9・11 米国同時多発テロ事件の際には、世界が分断されてしまうのではないかという危機感さえ持ったが、今回の地震・津波災害は、大変不幸な事件ではあったが、国際社会の対応を見ていると、9・11 事件とは対象的であり、ここ数年の明るい要素の一つとも言えるのかもしれないという意見がでたことが印象に残っている」と語った。同教授が指摘するように単純な比較はできず、有史以来最大級の悲惨な自然災害であったことは間違いないが、9・11 事件が憎しみの連鎖を産んだとすれば、今回の地震・津波災害は、両方の事件をマレーシア滞在中に経験した筆者が感情的にすぎるのかもしれないが、悲しみの中でも人道的な連帯感を産んだ好対照な世界史的出来事となるのかもしれない。